# 古林清茂こその主なる門下

古田紹欽

## 一　古林清茂

茂古林と云へば此の人が禪宗史上どう云ふ人であるかを問ふこと以外に、墨跡の上に珍重せられ、茶の數奇者の間に喧しい人である。南宋末から元にかけて茂古林と同じやうに在世した著名な禪者は數多いが、我國の文化、宗教の上に密接な交渉を持つた一人として、茂古林は誰にその代表的人物である。出世間的には云ふに及ばず世間的にも茂古林の名は廣く我が國人に知られてゐるのである。

茂古林、古林は字で、諱を清茂と云ひ、金剛憧、或は休居叟と號した。我國に幾人かの法を傳へ、鎌倉、室町期にその門流は隆盛を極めた。

古林は南宋の景定三月八月一日に渡州に生れた。幼少より宗教的素質の豊かな人であつたと見えて、社友と法華經を誦し、妙莊嚴王品に至つて感悟流涕したと云はれる。出家を志すの動機はこの時にあつたが、父母の聽す所とならず、二年を經て遂に十三才にして得度した。この前年、天台國清寺の孤岩啓に依止して啓を戒師とした。翌十四才元の革命に遇ひ、士卒のために刀を以て頂を切られんとしたが、色を變ずることがなかつたと云ふ。啓の下にあつた期間は詳かでないが、和平に復すると徧參し、最初に雪竇の簡翁敬に謁し、敬の寂に及んでついで南屏の石林鞏に見え、又鞏の寂に遇つて更に承天の覺菴眞に參じた。石林下にあつて既に微なる省を得たとせられるが、覺菴は達摩の再來人と賞し、流輩はこれより小達摩と呼んだと云ふ。年少にしてその究め得た力量は恐るべきものがあつたに相違ない。時に横川洪が雁蕩の能仁寺に謝事し、放牧寮に居して諸方の提唱を痛斥してゐたが、進んで謁し、三日にして始めて相看を許されて依止した。古林はこの横川の法を嗣ぐに至るのであるが、師としての横川は實に一代の古佛で

あつた。「師痛宗教濫觴、古響瘖欝、引宗據祖、屏遏今學、晨聳標立、不隨俗好惡」(五燈全書卷四十九、横川傳)と云はれもしてゐるのである。古林は如上の經歴からしてもわかることで有るが、どちらかと云へば天才的肌の人で有り、學識に於ても傑れてゐた。平日製作した所の語が巨編をなしたと云つてゐることからしても並々ならぬ文才が偲ばれるのである。惟ふに若し古林が横川に見えなかつたならば、恐らく古林は小器の天才人に生涯を終つたであらう。古林の自らの才に恃む自負心は、この巨編を横川に差出すに及んで根底から覆へされた。

及レ出ニ平日製作一巨編一、川竟火レ之曰、佛祖之道豈才辨之事、要レ須レ不レ落ニ情識一、直究根元、絶後再蘇、方堪ニ煅煉一、異日把ニ人杓柄一庶不レ錯ニ悞人家男女一、不レ然非ニ吾輩種草一」(古林和尚行實)

横川は巨編の價値を全く認めたかつたのである。古林にして見れば勢力を集結した巨編であつたが横川の目からすればそれは才辨の餘事に過ぎないものであつたのである。横川の嚴しい試を受けた古林は此處に一大轉換をした。古林和尚行實には「師不レ覺面熱汗下、自レ是頓息ニ身心一、如レ枯若レ橋」と古林の態度を表現してゐるが、爾後の古林は決して昔日の古林ではなかつた。一日、横川は雲門の須彌山の話を擧したことがあつたが(僧問ニ雲門一、不レ起ニ一念一還有レ過也無、門云、須彌山)未だ語の終らざるうちに古林は豁然大悟したと云ふ。時に驚くなかれ十九才の壯年であつた。翌、國清に歸り、至元癸未(二十)年に横川が詔を受けて育王に住するに及んで重ねて依止し、爾後六年の間その下にあつた。横川はつねに、唯寶、茂の二師のみ能く老僧の舌頭の落處を知ると云つて推賞したと云ふが、寶は古林清茂禪師語錄卷二に「寶藏主曩藏主至上堂」と見えてゐる寶藏主のことであり、茂は云ふまでもなく古林のことである。

ついて徑山寺の復興に力を盡した雲蜂高に迎へられて夏を度り、又平江靈岩啓の下に藏鑰を掌り、續いて承天寺にあつて蒙堂に居した。又徑山の虎巖伏に重んぜられて分座ともなつた。

大德二年、三十七才の二月三日、請を受けて承天より平江の白雲寺に出世した。この年にあること十餘年(行實九年と作す)、この間の語が古林清茂禪師語錄卷一に收められてゐる。至大二年に同じく平江の開元寺に遷り住し、その叢席は尤盛であつた。齡五十才になんなんとし、凡らく古林の最も圓熟し活動性に富んだ時であつたであらう。然し

法盛んなれば魔もまた生ずと云はれるやうに不意の事件のために僅か半載にしてその冬退席した。虎丘の東州永は石林鞏の法嗣で、嘗つて古林とは同參の人であつたと思はれるが、古林が開元を退くと翌春虎丘に迎へ、虎丘の祖たる紹隆の院塔に室を闢いて居らしめた。應接無方、互に主伴となつて宗旨を擧揚した。

古林和尚行實によれば大德二年は古林三十七才に當り、白雲寺に居ること九年にして開元寺に遷つたと云ふ、さすれば、大德十年（滿九年とすれば十一年）に開元入寺となる。然して半載にして退席と云へば虎丘に到つたのもその頃とならなくてはならない。所が至大二年冬に、開元寺退席としたと弟子の承宣が重拈雪竇擧古一百則集序に云つてゐる。承宣の集序は信ずべきであると思ふ故に白雲寺の住年を十餘年とした。

虎丘にあつては承宣藏主の請によつて雪竇擧古一百則を重拈した。承宣藏主は左右に待してこれを錄して一編となし、至大三年には早くも世に行れた。重拈雪竇擧古一百則は語錄卷三のうちに收められてゐる。虎丘にあること凡そ三年、皇慶元年六月十二日には聖旨を奉じて再び開元寺に住した。翌冬には仁宗より扶宗晋覺佛性禪師と賜號せられ、十一月には重ねて聖旨を受けて開元に於て上堂をした。開元に於ける両度の語は語錄卷一に共に存する。

開元再住の退席は何年であるか詳かでないが、延祐二年十二月六日には饒州永福寺に迎へられて入寺してゐる。永福の請を受けたのは平江路天平松下であつたと云ふから、開元退席後、屢く先住の天平山にゐたものかとも思はれる。永福に於ける道風大いに振つたと云はれ、建康鳳臺山保寧入寺の命を受けるまでこの寺に有つた。永福の語は語錄卷二に存するが、「赴保寧辭衆上堂」に終つてゐる。古林が宋の宗永の宗門統要に續いて宗門統要續集を撰したのはこの永福在住の頃であらう。

海印昭如語錄跋文の終に「延祐七年臘月望日鄱陽濬海住山清茂手書」とあるが、これは永福在寺のことを示すものであらう。

永福からは永嘉の江心に迎へられたこともあつたが辭して赴かず、保寧入寺の命を得るに至つて止むを得ずこれを受けた。行實には「不日建康保寧命至」と記して、この保寧入寺の時日を示さず、古林の現在語錄また保寧の語を缺いてゐて入寺の年時は詳かになすことが出來ないが古林語錄の馮子振の序文に「金陵保寧古林禪師泰定乙丑冬」（泰定二年）とあり、又目錄梵僧跋文に「佛性和尚於大元泰定丙寅間住保寧府」と見えてゐる泰定二年か、丙寅卽ち泰定三年頃には保寧に住してゐたことは明かである。古林が永福から保寧に移ることになり、官舟解纜になると祖餞綵帳、雲

日を掩ふと云ふ有様であり　道を南康に取る、廬山の諸禪達は舟上に古林を迎へ、次いて安慶を經て建康に達したのであるが、到る所で古林に法語を求むるものが有つた。法語を書いて示したもの無慮千有餘紙に及んだ云ふ。古林の道望推して知るべきものがあらう。保寧入寺開堂に際して「大吾一振、玄侶景從、雖諸方大龍象、莫不願爲洒掃給侍」(行實)と云はれてゐるが、保寧の語を缺くのは如何にも殘念である。

天目明本禪師雜錄附に一華五葉の古林の後序が有り、「時泰定二年十二月廿七日、合陵鳳臺休居雙清茂書」、「泰定二年臘月望日金陵鳳臺休居叟清茂」とも見えてゐる、又丹羽氏藏の古林里蹟に「泰定二年九月二日金陵鳳臺清茂」とも見えてゐる。

泰定の末年頃であらうか、祖塔を拜するために蘇台に趣き、綺白の請によつて萬壽寺に說法をしてゐる。祖塔とは虎丘紹隆の塔のことであらう。又この頃のことであると思はれるが英宗は師に詔して間道を求めたが、病て稱して起なかつた。然し幾くもなくして朝廷が大會を浙右の三宗の師德に命じて金山に開いた時、保寧は浙右の域外であつたけれども敦く請はれて趣いてゐる。

天曆二年秋、餘命の久からざのことを知つて學徒に勉施すべきことを誡め、遂に十一月二十二日保寧に滅した。この日寺衆が觀音大士殿に於て病の快癒を祈つた所、古林これを聞き斥けて「生可レ戀乎。死可レ避乎。吾素惡二諸方道眼不明一、臨終之際、祈穢卜問、錯亂顚倒、甚二於無知俗子一、汝等置二我於是輩一耶」と云つたと云ふ。世壽六十八、僧臘五十五。貴偈に「昨夜間龜哥報道今朝吉今朝吉」と唱ふ。滅する前々日、卽ち二十日には雪窓（悟光？）が古林を訪れてゐるが、古林は吾を送り了つて去れと云つて留め、二十一日には蔣山曇芳、龍翔笑隱が來つて緯縕として去らなかつたと云ふ。此等の人達は古林と平素交友の篤かつた人々であらう。古林が金剛幢と號し、又休居叟と稱したことは前にも云つた。竺僊は行實に晩年に休居叟と稱したのであると云つてゐる。叟と云ふ字義からして恐らくさうであらう。

猶終りに古林の語錄に就て一言してをくと、白雲、開元の兩度と永福の四會錄が先に出來て、保寧の語は編次される遑がなかつたと云ふ。竺僊の現存語錄跋文によるとこのことを次の如くに云つてゐる。

「佛性和尙於二大元泰定丙寅間一、住二保寧府一、仲謀献公首座、以二師提唱一、四方學者爭相謄寫、烏焉迭謬爲レ病、諸耆德檀越共相勸力、姑取二吳之天平前後開元并饒之永福一、凡四會錄以先繡梓、便其觀覽、然保寧之語益富、特未

レ遑ニ編次一也」

即ち現存の四會錄は古林の法嗣仲謀猷が師の語の提唱をし、それが四方の學者に謄寫されて校訂の後刊行されたものである。然もこの刊行を見たのは古林の歿年に近くで、保寧錄まで編せられる機會がなかつたものと見える。保寧の語は豐富で編次が容易のことでなかつたのであらう。現存語卷によつて見ると泰定乙丑（二年）に馮子振が語錄の序文を書いてゐて、竺僊の云ふ泰定丙寅の前年に既に語錄が成つてゐたことも知られる。仲謀猷が提唱するには提唱する語が成つてゐたわけで恐らく寫本であつたものが、泰定三年に板になつたのであらう。現存語錄の卷一、白雲寺語錄は平江路永壽禪寺住持小師元浩が編し、開元寺語錄は淸欲が編し、卷二永福寺語錄は饒州路崇報禪寺住持嗣法小師應槐が編したことになつてゐる。現存語錄は五卷から成り、四會錄は二卷で終り、重拈雪竇擧古一百則が卷三、小參普說が卷四、讚、頌古、偈頌が卷五をなしてゐる。初刊の當初がかかる五卷の形式を備へてゐたか否かに明確にすることが出來ない。

次にこの語錄の我國に將來され、我國で開板になつた由來を見ると、前の竺僊の跋文は更にかう續けてゐる。

「茲本既已流通、往往南詢衲子、携レ來不レ一、海內勝流、感羨慕レ之、而卒不レ能レ獲爲レ恨、辛巳夏森禪人必欲ニ幹募刊版一、以結ニ衆緣一、等持古光元禪師、聞慨然喜曰、昔嘗居ニ其座下一、諸彥欲ニ債爲一レ書、時迫ニ東歸一不レ果、今當以森公之志、以補ニ所欠一、由レ是爲レ之勸緣、與レ森共成ニ其事一、明年秋事未レ畢、森復南詢、堂中第二座葩公、先既一力施版、至レ是復幹募、以畢ニ其事一焉」

支那ではこの語錄が容易に入手は出來たと思はれ、その將來も一にとゞまらなかつたが、我國ではこれを獲ることが困難であつたことがこの文によつて窺はれ、遂に森禪人の出版計画となり、古先印元も參劃した。然し森禪人の入元によつて事成就に至らず、葩公によつて刊行のことを畢へたと云ふのである。葩公はまた「一力施版」とあつて獨力でこれより先にも刊行を遂げてゐたことがあつたことが知られる。森禪人は竺僊下にあつた人であり葩公とは春屋妙葩であらう。

天桂集前偈頌に「送森待者南詢」の偈頌がある。

古林の五卷本現存語錄の外に更に我國に現存するものとして古林淸茂禪師拾遺偈頌二卷がある。これは我國で編集

されたもので、竺僊の法嗣の椿庭海對の編にかゝる。拾遺とあるやうに前記の語錄にない偈頌を集めたものである。竺僊の刊古林和尚拾遺偈頌緒が卷頭にあつて編集刊行の因緣を述べてゐる。それによると海對が高麗所傳の抄寫本を得て板勸を竺僊に求め、更に圓曙藏主の處に於て三十九首の偈頌を、道皎首座の處で五首の題跋を獲て同じく竺僊に校正を求め、先に竺僊の校勸による二百九十四首の偈頌に併せて開板したものであると云ふ。圓曙は知られないが、道皎は後で述べる月林道皎のことである。この竺僊の緒によつて知られるやうに、古林の語が高麗に既に渡つて知られてゐたことは注意すべきことであらう。語錄卷五の偈頌に高麗から藏經の至つたことをよんだものがあるが、高麗との直接交渉が古林在世中からあつたものゝ如くである。

## 二　主なる門下——支那

五燈全書卷五十二によれば右の五人の法嗣を擧げてゐる。

南堂了菴清欲禪師、定慧大刀因禪師

寶菴松隱茂禪師　仙巖仲謀猷禪師

龍華會翁海禪師

增集續傳燈錄卷六にはこの五禪師の外に竺仙梵仙を擧げてゐるが、五燈全書及び全書より少し先に撰せられた、續燈存藁に至つて竺仙が如何なる理由に基いてか除外された。竺仙は我國に來朝した人で、我國人の法嗣を述べる場合に云ふとして、先づ五燈全書の云ふ五禪師に就て見よう。

### イ　了菴欲清

了菴の傳は可成り詳しく知ることが出來、根本資料とも云ふべき宋濂撰の慈雲普濟禪師了菴欲公行道記、增集續傳燈錄卷六所載の傳によれば次の如くである。

諱は清欲、字は了菴　別に南堂と號した。台州臨海の人で九才の時、孤仲父茂上人に隨つて徑山に登り、十六にして

虎岩淨伏に依つて得度した。時に叔父に當る希白明藏主、育王の横川如洪の會中より來て、一見して了菴の法器なることを知り、その指導につとめたが、その氣鋭の甚しきにより、古林にあらずしては師となすに足るものがないとして、開元寺の古林下に參ずることを薦めた。了菴は中至仁が「南堂和尙語錄續集序」に「古林禪師出東南、以無礙辯才、開大法施、便臨濟之道、震耀天下、若雷霆若日月、眞所謂命世宗師也、嗣興者南堂禪師、尤能大其聲、以鳴其道」と云つてゐるやうに、恐らく古林下に於ける最も傑出した法嗣と云ふことが出來るのであるが、了菴が古林に結ばれる因緣はこの時に熟したのである。開元寺に古林に見えた問答に、

性（古林）問云、近離何處

師云、徑山

性云、船來陸來

師云、二俱不レ涉

性云、汝安得到レ此

師便喝

性云、雖二是後生一却堪二彫琢一

と見えてゐるが、了菴が古林に參じた時には既にひとかどの力量を備へてゐた。ついで東嶼德海に楓橋に、東州壽永に虛丘に往いて謁して推重せられ、皇慶二年古林が再び開元寺に住するに及んで入院侍者となつた。更に藏鑰ともなつた。又徑山に還り虛谷希陵が延祐三年仁宗の旨によつて徑山に主となるに（五燈全書卷十、虛谷傳）選ばれて後堂首座となり、古林が建康保寧寺に遷つては分座說法した。天曆二年溧水（江蘇省）の開福寺に出世して古林の法を嗣いで拈香し、元統元年十二月二十六日には嘉興の本覺寺に遷つた。時に帝師大寶法王（順帝々）は金襴衣并に慈雲普濟禪師の號を賜つた。本覺にあること十年、偶々訴のことあつて鑒察御史、師を檄へて問ふや、吾は林下の人のみと云ひ、法家の面倒な交涉を避けて本覺の席を退き、寺の南堂に居した。至正五年七月十一日蘇州靈巖寺の請に應じて到るに衲子風を聞いて萃つたと云ふ。居ること三年復南堂に歸つて隱れた。幾くもなくして本覺も南堂も兵のために擲

れ、姪僧祖灝の謀によつて室を築き、所謂慈雲塔院に居した。了菴は榮名を土芥の如くに棄てゝ顧みない人で、至正廿一年夏、江浙行省左丞相康里なるものが大刹に迎へやうとしたが就かず、日に松雲の間に坐し、出水の蓮華の如くに風に倚つて獨笑し老のまさに至らんとするを知らなかつたと云ふ。翌々至正廿三年八月二十五日世壽七十六、僧臘六十を以て寂した。遺偈に「七十六年、無後無先、聖凡情盡、明月中天」と唱ふ、語錄九卷が現存し、學殖も豊かであつたことが察せられ又同門の謀猷と共に古林の續修宗門統要を助けたとも云ふ。

了菴の古林に贊したものに次の如きものがある。

先保寧和尙

無住爲本、妙有爲用、入佛入魔、白發百中、碎惡叉聚、樹金剛幢、不離本際、普應殊方、一柱擎天、三關巨闢、東山瓦鼓歌、少林無孔笛　爲天柱住無住贊

咄哉休居、若爲描畫、三尺竹篦、天上天下、便是補處慈尊也、須勘過了打、只个破沙盆、索起遼天價、秋林十萬莫學渠、學渠和我遭人罵　爲兜率桂秋林贊

滅却正法眼、平生恣拍盲、面南看北斗、當午打三更、此闕詔不起、西丘話大行、扶桑東畔看、萬國日輪明　爲日本感出玖石室贊

虹光貫地氣衝天、肋下眞堪築痛拳、黑漆竹篦掀海岳、正宗滅向瞎驢邊　爲興聖琦元璞贊

## ロ　仲謀良猷

諱は良猷　字は仲謀、仲謀の傳は殆んど知る資料が見當らないが、僅に「古林清茂禪師拾遺偈頌卷上」の「猷藏主相訪」の注記によると、古林がこの仲謀の訪れて來たのを偈頌によんだ時が、最初の相見であつたのではないかと云ふ。「是後往往隨逐之、鮮離左右、蒙在保寧時、爲座元」とも述べてゐる所によると、古林に謁したのは少くとも古林が保寧に出世する以前と云ふことになり、時に既に藏主であつたとすれば他の誰かにも從つてゐたことが想像される。了菴の傳の場合にも云つたやうに、古林の宗門統要續修に力をつくしたとも云ふから恐らく古林の永福在寺時分に參じたものであらう。了菴も「仲謀法見」（了菴語錄卷六）と呼んでをり、舊參の人であつたと思はれる。後、漂

水無想寺に出世し、溫州仙巖寺に遷つた。五燈全書卷五十二所收の傳には最も多くその語を錄してゐるが、別行の語錄として存するわけでなく、それも極めて少ないものと云はねばならない。了菴とは親しい間柄であつたらしくて、了菴の語錄のうちには仲謀に對する贊語、偈頌等が數箇處見えてゐる。歿年は不詳である。

## ハ　大　方　因

諱は因の一字のみ知り得、字は大方。鄭明德の銘が存したことを「了菴清欲禪師語錄」卷七の「悼定慧大方」の偈頌の注記にも云つてゐるし、「續燈存稾」卷七所收の大方傳にも云つてゐる。銘の略記であると云ふ了菴偈頌の注記によれば、至正十六年春に平江定慧に住し、後に靈岩山華首座の房に僑居し、同十八年九月十四日、薪を高棚に疊み、大を默じて大火聚中に化し去つたとしてゐる。了菴の「悼定慧大方」の四偈は次の如くである。

佛日西傾不奈何、奮身揮起魯陽戈、向來入空操戈者、火後爭收設利羅
彩鳳翻空出盛時、金烏爍破五須彌、全身跳入火中洛、後世無勞問隨皮、
吾衰不復夢周公、公識吾衰豈夢中、勝熱高風冠今古、硯池無底大燒空
善惡由來只兩岐閉眸作夜亦奚爲、鄭公筆力堪扛鼎來寫禪師化碑

大方が何時古林に參じたか、その点は全く明かにすることが出來ず、唯法嗣の一人として數へるのみである。古林清茂禪師語錄卷五に「送因侍者歸閩」の偈頌が見えてゐるが、この因が恐らく大方因のことであらう。

## ニ　松　隱　茂

この人も諱は茂とあるのもである。字は松隱、奉化の人。「續燈存稾」卷七、「五燈全書」卷五十二所收の傳に比較的詳しい。幼より習禪を好み跌坐すれば且に達したと云はれる。十八才の時、杭州傳法寺希顏に投じて落髮し、昭慶寺惠律師に戒を稟けた。參方して雲居に南澗泉を訪ひ、更に泉の命によつ永福寺に古林に見えた。古林との問答に

林問、來作二什麼一
師曰、生死事大特求二出離一
林曰、明知二四大五蘊是生死根本一、何緣入二此革囊一

師擬レ對
林便打
師豁然悟入

と云ふことがあつて豁然悟入したと傳へてゐる。古林は松〻の器を愛して第一座に居らしみた。又月江正印の道場に分座說法し、至正二年、行宣政院の請によつて明州瑞雲山淸凉寺の主となつた。一住十五年、東堂に退隱し、山を下ることがなかつたと云ふ。歿年は知られないが世壽八十五、僧臘七十にして寂した。佛光普照大師と謚されてゐる。古林淸茂下には二人の茂首座がゐたかとも思はれるが、古林の語錄卷五に「茂首座請讚」として次の自讚が載つてゐる。果して茂は松隱茂のことなるか疑問のまゝ左記に擧げてをかう。

是亦刻非刻亦、併蕩三要三玄、黻瞎摩醯正眼、箇是楊岐栗蓬、不比睦檐板

古林淸茂禪師拾遺偈頌卷上に「賜曾松庵茂首座號孤雲」と見えてゐる茂首座が考へられる。松隱茂と同人か不明である。

## ホ　會翁淸海

諱は淸海、字は會翁、了菴と同じく臨海の人である。年三十にして家を棄てゝ徑山虎巖淨伏に投じて祝髮し、ついで天日中峯明本に謁示を求めた。中峯下にあつては寢食を廢すること久しくて努力したが悟入するに至らず、時に東洲壽永が虎丘に、古林が開元に、東嶼德海が楓橋に住してゐたので、蘇州に往つてこの三大老の門に出入した。年有つて台州龍華寺に出世して法を古林に嗣いた。九十三才になつて育主に抵り、古林の師である横川如珙の祖塔を守り、此處に寂した。歿年は知ることが出來ない。古林の語錄卷三に「示海首座省母」と云ふ法語が有るが、恐らく會翁に示したものであらう。

猶この外、古林下の傑れた人としては承宣が有り、前にも述べたが、古林の重拈雪竇舉古一百則を集めて世に行つた。承宣は泉州の人、無言と號し、古林が虎丘松隆の祖塔の室に居した時、莒藏主と共に左右に服勤した。然し法は古林に嗣かず、資福、江心、能仁に住したが法道が振はなかつたと云ふ。法を佗に嗣いたと云ふことに對して當時非難があつた。

莒藏主に就ては古林の語錄卷五に「莒藏主請贊」の古林の莒藏主のためにした自讃が見えてゐる。又、古林下に鎧上人なる人がゐて、これが古林と神足であつたことを竺僊が「來來禪子集」のうちで述べてゐる。

## 三　主なる門下——日本

### イ　竺僊　梵僊

先づ渡來僧として、古林の風を我國に傳へたものとして竺僊梵僊を擧げなくてはならない。梵僊は諱、竺僊は字である。來來禪子と號し、或は寂勝幢と號し、勉年鄉土を思ふて思歸叟とも云つた。竺僊の傳に就ては古林下の同參であつた了菴が「竺僊和尙行道記」を書いてゐるがこれが最も根本資科であらう。竺僊の法嗣海壽が師の行述を携へて渡海し、了菴にこの記を求めたものである。又、翰林學士臨川參素の撰した「日本建長竺僊和尙塔銘」が有るが、行道記と殆んど同じである。增集續傳燈錄卷六にもまた竺僊傳が見られるが、これは極めて簡略なものである。今、主として行道記により、他の資科—語錄等をも參照して竺僊の經歷を眺めて見よう。竺僊は明州象山縣の人で至元廿九年十一月に生れ六才鄉校に入り、一年にして韻書の飜切に通じ人の心經を誦するを聞いて能く記憶したと云はれる。幼にして宗敎的素質の豊かな人であつたらしく葷腥を絕したと云はれ、父母はその素質からして十才の時に、吳興の資福寺別流源に從つて驅烏たらしめた。十八才、抗州靈山に往き瑞雲隱に依つて度牒を得、その師たる虎巖淨伏の塔の禮して剃髮した。ついで遊方し、首めに淨慈に晦機元熙に謁し、次に天童に雲外雲岫に、更に四明開商隱予の名を聞いて參じた。又抗州に邁り靈叟に元叟に行端に、淨慈に東嶼德海に依り、虎跑に止岩成にも見えた。止岩示すに鎭海明珠の話を以てし、徵詰するに滯ることがなかつたとせらる。然し竺僊自ら安んずる所なく明師に遇つて大事を決了せんことを觀音に祈つた。時に天目に中峯明本が有つて法幢を揭ぐるを知つて往いて參じた。中峯は元代に於ける屈指の禪者であるが、竺僊を見て奇道の人なりと許してゐる。中峯が竺僊の說をなして贈つたのは此の時であると云ふ。

偶〻建康より來つた僧があつて、保寧に於ける古林の鉗鎚の天下に妙なることを傳へた。竺僊は卽宵往いて歸した。その求めてやまざる道心の熱烈さは決して安易な自己滿足を許さなかつたのである。適〻古林の陞座に遇ひ、一たび擧唱を聞いて心地豁然し座下に進拜して問答往來した。

〔保寧古林〕問二鄕里一

師曰、明州

寧曰、明州、有二布袋和尙一是否

師曰、是、卽今又不レ在二那裏一

寧曰、他說二等個人一聳

師曰、卽今來也

寧曰、作二何面一目一

師曰、且請二趺坐一、容二梵僊禮拜一

古林は欣然として竺僊の弟子の列に加ふことを許した。又、古林は示すに卍菴の佛果の處に在つた雜妄想の話を以てしたことがあつた。竺僊は覺えず汗流れて背にあまねくし、語の對すべきものがなかつた。この課題は竺僊を苦しめた。一日湯泉に遊んで大慧廣錄を閱し、脫然としてこれを開悟することが出來た。竺僊は回りて所悟を古林に通じた。

寧問曰、儞前日因レ甚納二敗闕一

師曰、不敢

寧曰、放二儞三十棒一

これより師資相契ふたと云はれる。其後、淸凉に典藏となつて道聲高く、道舊のもの江陰の白龍に招いたが就かなかつた。天曆二年徑山に登り、時に明極楚俊が文、廣二首座の拜請に依て日本に赴くに會ひ、明極に從つて日本に渡ることになつた。竺僊は南禪寺語錄に見ゆる明極和尙七周忌辰普說に云つてゐるやうに、明極に隨伴して我國に來るこ

とは再び歸國の困難なるを思うて欲する所ではなかつたのであるが、明極及び文、廣二首座の說得によつて、天曆二年、我が元德元年五月に明極に從つて福建を離れ、六月太宰府に着いた。竺僊は正に三十八才であつた。竺僊が日本に渡るに到る決意をしたのは一若しこれが眞實であるとすれば一嘗つて古林が、僊は異時化を日本に大にするであらうとのことを云つたことを追念もしてのことであらうが、遠く我國に來ることを躊躇しつゝも遂に來つたのである。もとより明極は古林の師である橫川如珙に參じ、虎巖淨伏に法を嗣いた人で、古林との親緣の閒柄で有り、恐らく竺僊は古林と明極との了解の上で、明極に從つて來たのであらう。竺僊は虎巖の塔を拜して剃髮した因緣も有り、明極との關係も又深いものが存してゐたに相違ない。

元叟行端の嗣である行中至仁が、竺僊和尙語錄に序し、「惟古林諸子多賢、而嶄然出者二人、其一南堂欲公、道鳴二中國一、其一竺僊、化徹二異邦一、可レ謂二甘露門矣一」と述べてゐるが、確に竺僊は古林下に傑出した人であつた。竺僊は支那にあつては專ら內に道業を磨き、化を外に盛んにすると云ふことはなかつたが、我國に來朝後は道望自ら高く、其の化に浴するものは夥しきものが有り、行中の序言は決して虛言ではなくなつたのである。

竺僊は太宰府に着くや迎へられて大慶精舍に館し、大友直菴(拙稿、大友直菴に就て參照)は豊後萬壽等に聘せんとしたが、竺僊の名已に鎌倉幕府に達してゐて止留することが出來ず、翌元德二年二月には鎌倉に入つた。明極の建長寺に住するにその第一座となり明極の弟子、越後守高景奏して明極を嗣いで南禪寺の席に迎へやうとしたが拒み、復重ねて萬壽寺に聘せられもしたが往かず、正慶元年二月十四日北條高時の請によつて淨妙寺に住した。開堂の日瓣香を古林のために熱向してゐる。古林の示寂を竺僊が知つたのは元德二年七月二十三日のことで、「來來禪子東渡集」には「祭二佛性和尙一」の文が見えて居り、うちに「不肖去載已巳東來、不レ得二與レ師袂別一有レ懷二萬里一未レ由二再覲一、今年七月二十三日聞二師化一、始以爲レ誣、不レ信詰レ之、又詰レ之果然、使下人如レ負二芒刺一、如レ飲二鴆毒一、如レ醉如レ焚、不レ知二其身一爲レ僵仆一矣」と云つてゐて、師を思ふ切なる心情を吐露してゐる。竺僊が明極を嗣いで南禪に住することを拒んだのもこの心情に於て然らしめたもので、他意あつてのことでなからう。足利尊氏、直義の兄弟相共にまた歸崇し、建武元年十一月十五日淨智寺に主となつた。入寺に際して三萬金と三千畝の地を尊氏は淨智に寄せた。翌、天

柱峰下の故址を以て壽塔となし、其の山下に海を見下し、楞伽山に類する勝景を愛した。この地に又楞伽院を搆め、楞して心地要門と云ひ、燕居の所を一粟乾坤と、云ひ、語心堂と云ひ、含輝室と云ひ、最勝室とも云ひ、絕頂には亭を作つて妙高と云つた。妙高亭と題する三首の偈頌が「竺僊和尙天桂集」に出てゐるが、そのうちの一首に「到二此虛空最上嶺一、却於二足下一看二青天一、德雲行處日卓午、照見別峯橫二翠煙一」と云ふのがある。建武五年十月三日には大友直菴の子氏康の請によつて三浦の無量壽寺の開山となつて入寺し、其後は楞伽院に居を卜してゐた。曆應四年四月十三日。光嚴上皇の院宣によつて南禪寺に開堂演法した。南禪寺出世に就ては尊氏、直義の篤き歸依による支援のあつたことは云ふまでもなく、出世の後は屢々兄弟共に參じ、參龍陂を鑿ち、銷春亭を作り景致に力をつくした。その入寺の年八月十五日は後醍醐天皇の三周忌に遇かて冥德を祈り、又九月十五日は亀山上皇の三十七回忌に値つて功德を追崇した。又同年八月には朝廷南禪寺を以て五山の上位に昇せ、天下第一刹とせられた。時に竺僊上堂して

「南禪無意上二諸方一、院宰朝臣力主張、合下把二虛空一爲下法座上、宜下將二大地一作中禪床上、寶書曆應年中際、檀起毘盧頂上行、孰解出頭天外看、霜鐘金鼓振二高堂一」

と云つてゐる。十月七日には南山士雲の七周忌を修した。曆應五年正月退席を志し、一旦退院上堂をしたが、尊氏、上皇に奏聞して院宣の降下を願ひ、再び南禪の席にとゞまらしめた。この年九月二十七日、明極楚俊の七周忌を行ひ、陞座普說をしてゐる。普說のうちに、同行者を失つた寂しい心情が僞りなく述べられてゐる。思歸叟と號して鄉國を慕つた心持が察せられる。康永二年五月、光嚴上皇南禪に臨幸せられ、竺僊は上皇に對して陞座した。龍顏大いに悅びたまひ饌を賜つて「師其加鑿、母視朕也」と仰せられた。康永三年四月二日、南禪二世現菴祖圓の三十三年忌を修したのを最後に南禪を勇退し、本寺に壽塔を建てゝ楞伽院と稱して此處に居した。

貞和二年二月、眞如寺の請を受けて入寺し、同年十一月廿九日には尊氏の請を入れて建長寺に住した。同四年四月疾によつてこれを辭し、七月には淨智寺楞伽院に病を養つたが同月十六日、遂に五十七才の生涯を此處に終つた。竺僊には淨妙、淨智寺に無量壽、南禪眞如、建長の五會語錄の外に來來禪子集、天柱集、尙時集、東渡集の詩文集が有り、學德共に傑出した人であつた。

竺僊が古林に參じたのは保寧に於てであつて、今日古林の保寧語錄を欠くために、古林との關係資料を見ることが出來ないのは殘念である。唯古林清茂禪師拾遺偈頌卷下に「寄仙藏主」の一偈即ち「提綱語句未曾聞、一面相招氣義敦、得一个牛還一馬、不妨扶起破鈔盆」と云ふのと、竺僊のために作つた來來禪子歌が有り、その關係を窺ふのには極めてとぼしい資料であるけれども注意すべきものであらう。又、前述したやうに、竺僊の來朝したその年に竺僊は寂し、來朝後の交渉と云ふものもなく、竺僊の亡き古林に對する一方的資料が僅かながら詩文集に見らたるものがある。これも決して多い資料ではないがやはり注意すべきものであらう。即ち「天柱集」に古林和尚贊、「玉几峯頭一鶚飛、鳳凰臺上鳳來儀、巨元六合齋韶作、景定餘音無子遺」と有り、「四明竺僊和尚贊語」に「佛性和尚」と題して「千古鳳臺一代龍門云々」と云つてをり、「來來禪子集」には古林下の鑑上人、謙侍者に就て觸れてゐるものが見られ、又同集には「鳳臺入室語」二則が記されてゐる。前述の古林との問答と共に師資の機緣の一端を知ることが出來る。

「一日師於室中一隻語云、一字不著書、是甚麼字、答云、金剛鑄鐵券、師云、一字因レ甚也不識、答云、恰値不識、師云、不識最親也、答云、更是不消得、師云、三十年後此話大行、答云、切忌錯舉」

又一日、師據レ室云、盡大地是彌自己、因レ甚踏不著、即以脚作踏地勢、師云、沒交涉、答云、謝和尚證明」

この外、「東渡集」には前引の「祭佛性和尚」の文が有り、師の化を悼み、生殘つた寂しい氣持を述べてゐる。竺僊は了菴と共に確に古林下の雙璧で、兄たり難く、弟たり難く、竺僊は「了菴我法兄」（竺僊和尚偈頌）と了菴を敬し、了菴は「竺仙法兄」（了菴語錄卷七）と竺僊を敬してゐる。竺僊の法統は我國に傳へられた禪二十四流の一をなすのであるが、古林下の我國に於ける最も大きな勢力であつたと云ふことが出來るのである。

## ロ　別傳妙胤

別傳も亦渡來の人と傳へる。本朝高僧傳卷二十八の傳には「不レ詳其姓出」と云つてゐるが、同傳の贊に「自寬

鎮海明珠「朔州東邑懷政禪師、仰山來參、師問、汝何處人、仰山曰廣南人、師曰、我聞廣南有鎮海明珠是否、仰山曰、是、師曰此珠何形狀、仰山曰白月即現、師曰、將得來否、仰山曰、將得來、師曰、何不早似老僧看、仰山曰、昨到溈山亦就彌寂索此珠、直得無言可對無理可宣、師曰眞師子兒大師子吼」（景德傳燈錄卷九懷政傳）

元一至 元德中一、宋元禪匠相次東來、及 康永末一別傳禪師獨殿而至」とあつて渡來僧であるとし、延寶傳燈錄卷五の同傳には、明かに「元國人、康永年中來」と云つてゐる。師蠻が本朝高僧傳の別傳の傳を書かうとした時には既にその行錄は亡失してをり、僅に建仁に住するの語と、別傳の弟子玉崗珍の遺偈とを師蠻が陳策中に得て、別傳の傳を本傳に錄したのである。その建仁の上堂の語によれば香を虛谷希陵に熱向してゐる所から、師蠻は詳傳が知られないまゝに元國の人と推定したのであらう。

然しこの確實性の薄弱な推定は吟味されなくてはならないのである。

「古林清茂禪師拾遺偈頌」卷下に「送海東胤首座」なる次の一偈が見られ

滅宗滅却滅翁門、吾祖家風蘊不存、慣涉海涯經雪浪、曾登仙嶠眇崑崙、遠來湖寺情尤重、夢入天宮道益尊、一句不辭如鐵槪、要人擔荷到兒孫

この偈に續いて左の注記がまた有るのである。

「此卽前住淨智別傳胤公也、昔号滅宗、泊回朝卽自改之、與余亦相友善、觀其爲人之禮、亦甚似淳篤信實者、今乃不知何處、其亦君子之好遯歟」

この「送海東胤首座」の偈と注記によると、古林下にゐた人であることゝ、海東と云ふ意味が日本を指し、別傳が嘗つては滅宗と號したことが知られる。又別傳が日本に渡海して、海東胤首座と呼ばれたのでないことは、回朝と云ふ文字が存することからして明かで、別傳の出生は日本でなくてはならないのである。「了菴淸欲禪師語錄」卷七を見ると更に「滅宗示胤侍者」なる偈頌が存する。

瞎驢滅却臨濟宗、黃河九曲不敢東、東山拋出暗號子、鐵蛇彩鳳盤晴空、堪笑堪悲川士苴、覷面當機看脚下、打失眉毛萬事休、引得傍觀笑聲噬、宗風似此爭不滅、此心合対瞎驢說、說向瞎驢驢不聽、喝聲迸落千歲月

支那では滅宗と號してゐたことがこれによつてでゞわかり、了菴と交友のあつたことも知ることが出來る。

「竺僊和尙偈頌」を繙くと「次韻答 橫洲別傳禪師」と題する三首が又見られる。

一舸迢迢絕三百溟、西來不レ解救三迷情一、待時吾必還歸也、回首扶桑千歲栄

賓中主也主中賓、日日思歸念念新、自レ是故鄉田地闊、豈應無處著閑人

優鉢羅花不妄開、老天於レ此豈無レ懷、南禪欲レ借二維摩手一、斷二取橫洲一入レ座來

これは竺僊が曆應四年に南禪寺に入寺した頃、猶支那に留つてゐた別傳からの偈に対して答へたものである。橫洲は寧浦で、別傳は當時其處にゐたものと見える。竺僊とは古林下で同參であつたのである。曆應四年頃と云へば、別傳が嗣法したと云ふ虛谷は既に至治二年、卽ち二十年も前に逝つてゐるし、古林も十三年前に歿してゐて、別傳は寧浦の誰かの所に依つてゐたものもあらう。其後程なく康永年間に歸國し、越後の普濟寺に住し、建仁寺に出世した。師蠻が得たと云ふ建仁の語が僅に本朝高僧傳と延寶傳燈錄に載せられてゐる。後、淨智寺に移り、退いては大圓菴を構へて居したと云ふ。歿年は知ることが出來ない。法は古林には嗣がなかつたが、その會下にあつた有力な人であつたことには疑がないのである。

竺僊の「來來禪子東渡集」に賀二同門別傳胤禪師出二世普濟一」の偈がまた有るが參考までにこれを引いてをかう。

佛祖出興無二別法一、流傳今日亦悠哉、把茆蓋レ頂不レ須レ大、三箋束レ腰休二放開一、海底鯉魚看二跳誇一、天邊金鳳忽飛來、令二人長憶二鷲山事一、迦葉師兄笑滿レ腮

猶、別源圓旨とも交りの深いものが有り、別源の詩文集「南遊集」に「和二滅宗首座三題一有感憶盧山途中偶作」とか「酬二滅宗首座一」とかと題するものが見えてゐる。淸拙正澄とも交りが又有り、「禪居集」には「胤首座參二古林和尙一」「胤侍者之二雪峯一」と題するものが存する。

## ハ　別源圓旨

諱は圓旨、字は別源、越前の人である。傳に就ては中巖圓月の「日本故建仁別源和尙塔銘並序」がよるべきもとの資料であらう。永仁二年十月二十四日生れ、幼にして佛種寺竹菴圭に依つて童行となり、十六才の時に薙髮した。圭は其後、別源の根器の傑れたるを觀て、久しく村院に留まることを許さず、偶々東明慧日の我國に渡來して、關東に洞上の宗風を盛んにするを聞いて住いて參ずべきことを薦めた。時に東明は圓覺寺に主となつてゐたが、別源が參ず

るや一見して入室を許した。東明下にあること十二年、遂に師資契合した。二十七才の元應二年に入元し、古林清茂、雲外雲岫、靈石如砥、中峯明本、無見先覩、古智哲、竺田悟心、南楚師悅、龍巖眞、船若誠等を參訪した。就中、古林に親炙すること最も久しく、江湖を徧游した後に再び保寧寺に歸つて參じ、藏職を領知した。南游凡そ十一年の長きを閱し、元德二年に歸國した。圓覺の後板に任じ、幾くもなくして建長前板に移り、康永元年越前に回つて弘祥寺の開山となつた。又、鎭西壽勝の請を入れて往き、越前の善應、吉祥二寺の開山ともなつた。文和三年、東陵永璵南禪寺に住するに際して分座し、延文二年には眞如寺を匡した。翌脚疾を患つて越前に退いたが、貞治三年六月になつて、足利義詮に請ぜられて建仁の命を受け、疾を以て拒んだが命の荐りなるために遂に同年九月、建仁に入寺した。同月十一日、病革つて衆を辭し、十月八日、諸弟子の建仁に築いた塔基洞春菴にうつり、同月十日に化した。閱世七十一。僧臘五十四。

別源は古林に親炙すること最も久しかつたと云ふが、恐らく饒州永福寺に古林を扣き、更に古林の保寧に遷つた後に參じたのであらう。古林の語錄卷五に「送旨首座」と題する偈頌が有るが、これは明旨を送つたものと思はれ、又別源と題する二偈が「古林清茂禪師拾遺偈頌」卷下があるが、これも別源明旨を指すものであらう。

別　源　二首

涓涓不與衆流同、遂浪隨波渺莫窮、必竟滄溟無一滴、大千何處不朝宗

不知一滴自何來、流入　溟白浪堆、道是曹溪猶未是、且將深淺與人猜

更にまた同卷下には「送旨藏主東歸」と題しての一偈と續いて長歌が存する。

手中玉鍰千鈞重、腦後圓光萬丈長、轉向如來藏中看、到家須合爲敷揚

金陵鳳臺春已老、萬里南歸宜及早、大唐國裏無禪師、問答縱橫休草草、若言是有還是迷、此宗豈可論東西、當機出沒走迅電、大用縱奪轟奔雷、我今無言汝休領、念汝慇懃再三請、晴窓掇筆寫長歌、窓外梅花弄淸影。

この長歌の次に注記が有つて「昔號別源也今不知如何」とあるから、旨藏主は明かに別源を指すものである。注記のうちに云ふ所によると、古林が一偈を書して金陵鳳臺何々と名字を書かうとした所、旨がこれを遮つて長歌を乞う

たため、金陵鳳臺の次に春已老と續け、この長歌を作つたものであるとしてゐる。又今は失はれてゐる保寧錄中に「示旨侍者、有一片眞心如鐵石芽字年堪作吾家兒之句者」、と云つてゐる句があつて「亦此公也」ともしてゐる。別源は天曆二年(我、元德元年)に古林が歿したので、その翌年歸國をなすに到つたのであらう。

別源と竺僊とは古林下で單なる同門であると云ふだけでなく、互に親しい關係が有つたと思はれる。竺僊の「天柱集」には「次韻答別源首座盆石」、「次韻別源首座」五首、「訪二別源一」「再賡寄二別源首座一」と題する偈頌が見えてゐて、その往來が知られる。又別源の「南遊集」には竺僊が序をなしてゐる。

「南遊集」と云へばそのうちに「和乙休居和尙頌下龐翁指二室中雲公一案上韻甲」、「辭二鳳臺和尙一」「鳳臺藏主寮結夏乘拂」と云つた題による詩文が存してゐる。別源が在支時代に於て古林下に占めた關係を知る一つの手懸りとならう。

丹羽氏藏の古林黑蹟(別源に與へたもの)によれば「日東旨禪人有志於道衆首三年云々」とあるが、これは偏遊後の再參三年を指すのであらうか。

## 二　月林道皎

諱は道皎、字は月林、獨步叟、圓明叟と稱し、晩年には西山暮翁と稱した。傳に「大梅山開山月林皎禪師行狀」がある。永仁元年に久我具房(具房は永仁元年以前に薨ず。所傳は誤であると云ふ)を父として生れた。別源の出生に先つこと一年である。幼にして父を失ひ、母に隨つて越前平泉寺に入つて童子となり、偶々人の相模より來て、禪門のことを語るを聽き禪を慕うて薙髮した。時に十六才、ついで相模に佛國禪師高峯顯日に依止した。高峯はその法器なるを見て懇に提引し、高峯の建長入寺の際は選ばれて燒香侍者となつた。正和五年十月高峯の寂に遇つて、京都岩倉に移つた。その時、大燈國師宗峯妙超が大德に化を昌んにしてゐたので頻りに性見するに到つた。大燈もまだ三十有餘才、月林は二十有餘才で互扣互應した。正和五年には大燈は花園天皇に對座して法を說いてゐるが、月林もまた元應二年には天皇に召されて法談した。その法談は天皇宸記によると屢々であり、殊に夜をかけて天明に及ぶと云ふ信任であつた。

元享元年冬、月林は入元を志した。同年十二月二十五日の宸記には次の如くに見えてゐる。

二十五日、今夜妙曉上人參、密密受レ業、明後日可二下二向鎭西一、卽可二渡唐一之故也、此上人明昭宗師也、當世無雙、朕歸二仰之一、此間連二談宗旨一

裏書

受衣事、先例不審、然而此聖人、於レ今者殆不レ知二再會之期一、歸依之符契不レ可レ不レ見、仍密々有二此義一、旁以可レ有二謗難一歟、仍殊所二隱密一也、於二此宗一者、不レ可二得而稱一者也、誰敢同、然近代諸宗都不レ違二深義一、可レ悲事也、於二此宗一者、獨有二頓證義一、可レ貴事也、

花園天皇は月林を當世無雙と推賞せられ、今その人の入元に遇つて再會の期し難いのを慮り受衣されたのである。元亨元年と云へば月林まだ廿九才の若さである。年齡からしても經歷からしてもその受衣は他から起るであらかも知れない謗難を恐れて隱密に行はれたのである。受衣の翌日、宸翰を下してその行を送られた。

昨夜受業之儀、感悅無レ極、縱雖レ隔二萬里之波濤一、同風之旨、何有二遠近一義同二國師一、後日必有二其號一、當時非二自專一、尤以遺恨、併期二再會之時一者也

かくて翌歲入元した。英宗の至治二年に當るが、月林の行狀によると古林は金陵保寧に住してゐて、その下に參じたと云ふ。

休居曰、汝知二主人翁一麼

師曰、不知

休居曰、因二什麼一不知

師曰、不二當道皎不一レ知、佛祖也不知

師進前叉手立、

休居曰、佛祖爲二什麼一不知、到二這裡一爲二什麼一不二肯住一

師以二両手一作二擎勢一、拋二向面前一

休居曰、毘婆尸佛早留レ心直至、而今不レ得妙レ

師曰、和尚年老心孤

休居呵々大笑、

かくして授機し、古林下を辭して大仰に古心誠に謁し、典藏の職に就いた。然し幾くもなくして再び古林下に歸つた。

休居問曰、近日行履如何、

師又手當胸

休居曰、未在更道

師曰、再犯不容

休居曰、三級浪高魚化龍、癡人猶戽野塘水師喝一喝

休居曰、遇在什麼處

師連喝兩喝

休居曰、遇在老僧

師曰、謝和尚老婆心切

時にと云ふ問答が行はれた。又一日、古林が坐の次に左右にかう問ふた。斬爲兩段時作麼生と。左右のものは答へるものがなかつたが、月林が後れて至り、この問を受けると、勞而無功と答へた。古林はこの答を許して、これより師資道契したと云ふ。天曆元年正月廿三日には佛惠知鑑大師の號を賜り翌二年には保寧の後板に居した。冬節乘拂し、その提唱をしたが、語を聞いたもの驚懼しないものはなかつた。無想が提唱の語を喫賞して偈を寄せた。

道人來扶桑、肝膽金石堅、遼天鼻孔正、不受傍人穿繞牀振錫兮古鳳臺前、夜夢說法兮兜率陀天、揭性天之慧日、發智海之源淵

月林が後板の職を解いてまもなく、古林は寂した。古林が寂する三日前、卽ち十一月十九日のことであるが、月林が侍してゐると、古林が問うて云ふに「爾得得杭海而來、覓箇甚麼」、と。月林は「開口見膽」と答へた。古林又

問ふて「與麼祇対滴水難消」と。月林は喝した。古林はこれに対して自分は病んで儛を打することが出來ないと云つたと云ふ。（古林行實）古林は月林に法衣を付してゐるが、月林は確かに深く愛された弟子である。古林の寂した翌年春、月林は本國に歸つた。

歸國すると暫くの間、京都の法華山傍に菴を結んで居した。大燈は大德寺にあつて月林の恙なく歸つたのを喜び頻りに便を遣して通問した。一日月林が大燈を訪れたことがあり、談が古林の機用に及ぶと大燈は稱嘆してやまなかつた。其後、天台僧寛舜なるものが月林下に服を改めて歸し、所管の敎寺を禪寺となして月林を迎へた。これが大梅山長福寺である。月林は鳳臺に有つた昔を忘れないために、嘗つて彼地の所居を清居と號したその號を長福方丈の寢室に名けた。

花園上皇は再び歸崇され皇居に召されて、或は長福に往いて參扣せられた。當時の公卿もまた多く歸依した。月林は長福の北に塔院を建て、清涼と稱し古林の像を安じた。月林は全く古林の風を純粹に守り傳へた人であらう。觀應二年二月廿五日、壽五十九、臘四十四を以て寂した。延文二年三月十日、後光嚴天皇は普光大幢國師と諡せられた。

月林は入元以前に妙曉と云つたが、この名は恐らくは高峯から授かつたものであるまいか。古林下に參じてこの妙曉は月林と改められたものと見える。月林は古林が與へた道號であらう。長福寺文書に、月林の號に賦した古林の一偈が存する。

桂輪孤朗碧天寬、萬木森次照夜寒
不是曹溪曾拈出　至今誰作話頭看

月林は古林下では道皎と呼ばれてゐたことが知られるが、この諱は渡海以前から用ひてゐたのかも知れない。古林の行實では竺僊は「海東皎首座」と呼んでゐるし、古林が月林の語錄に跋したと云ふが、それにも「跋皎首座語錄」（古林清茂禪師拾遺偈頌卷下）と見えてゐて、皎首座と呼んだことが明かである。月林が古林に侍したのは八年の長きに亘るので、この師資の關係を物語る色々の資料が存していゝわけであるが、古林の保寧の語を缺くために、この

月林の場合に於てもその關係を資料的に示すことが出來ない。月林には現存の「月林皎禪師拈頌古」の他に、古林が跋した語錄も有つたに相違ないのであるが、寡聞にして未だかゝる語錄の所在も知ることが出來ず、猶古林との關係を不明にしてゐるのである。

了菴清欲の語錄卷七に出てゐる「和皎首座雜言韻」と、竺僊の「竺僊和尙偈頌」に出てゐる「閱大梅皎首座拈古頌古寄之」とは道皎に關する乏しい資料のうちにあつて注意すべきものであらう。

和皎首座雜言韻

一靈不昧古猶今、妄想塵塵自陸沈合浦明珠生蚌腹、凉秋白月到天心
得失雙忘語意眞、當機拶倒主空神、千門萬戶無關鑰、八臂那吒現半身

閱二大梅皎首座拈古頌古一寄レ之

已聞梅子熟多時、無數黃金綴滿枝　可惜無人能下口、大堪止渴與充飢

又次に述べるであらう同門の石室善玖が、貞和四年春大宰府より月林に贈つた詩簡が存する。（長福寺文書）石室は長福寺と四世ともなつた位の人で、恐らく月林とは深い交渉の有つた人であらう。石室善玖語錄のうちには貞治二年二月廿五日の大幢國師忌拈香語が見えてゐる。

終に附言してをくが、古林清茂禪師拾遺偈頌の卷末に「跋鷲福請定山和尙江湖頌軸」以下五つの古林の跋文がある。これはこの書の編纂に際して道皎のもとより獲し收められたものであると云ふ。

道皎の自讚に「鳳凰臺上皎首座、大梅山中主人翁、聖名凡號虛聲兮、殊相劣形色卽空、手裡竹杖當頭底江南　江北勞無功、不知半身爲誰現、眞々如鶴弄宗風」（長福寺文書）と云ふ。古林の法嗣を以て任ずる自信が窺はれる。

## ホ　石室善玖

諱は善玖、字は石室、筑前の人、少時の頃の傳は知ることが出來ない。文保二年に古先印元、無涯仁浩等と共に入

元し、廣く當時の宗匠の門を叩いたと云ふ。就中保寧に古林を見え、その下にあること久しくして遂に印を稟けた。前にも云つたやうに古林の保寧の語は知ることが出來ないために、この石室の場合に於ても、現存の古林の語錄、及び拾偈頌では何の關係資料も得ることが出來ない、唯了菴の語錄卷五を見ると、了菴が古林の贊をしてゐるものゝうちに「爲日本感出玖石室贊」として次の贊をしてゐる。

滅却正法眼、平生恣拍肩、面南看北斗、當年打三更、此尉韶不起、西丘話大行、挾柔東畔看、萬國日輪明

日本感出と云ふ意味は明かでなく、感出は他の例によれば寺名でなくてはならないが、何か誤植であるかも知れない。（續藏所收本による）石室は嘉曆初年に歸國したと云はれ、在支八年になるわけであるが、了菴が玖石室と呼び捨てにしてゐる所などから推察すると同じ古林下でも未輩であつたと思はれる。月林は若くて古林に參じた人であるが、石室は猶それよりも若かつたのではなからうか。同行して入元した古先は時に二十四才であつたと云ひ、石室の年も恐らくそれ位であつたであらう。

歸國後、二十餘年間の石室の動靜は明かでない。貞和三年四月十三日に顯孝寺に入寺し、古林の法を嗣いで香を熱向した。ついで觀應三年（正平七年）三月十五日に聖福寺に住し、康安元年には萬壽寺に、更に貞治年中天龍寺に、康德寺に住し、應安元年七月五日には建長寺に入寺した。顯孝以下建長寺に至る語錄が現存してゐる。建長入寺以前に圓覺寺にも住したがその語は欠いてゐる。又、長福寺に住してゐるがそれは同寺第三世簡翁思敬が永和二年八月十六日に寂してゐるその後のことであらう。長福寺の古林先師の淸凉塔に新に御筆を賜うた時には石室を請じて陞座もせしめてゐる。その慶讃の語は語錄に收められてゐるし、師蠻がまた全文を本朝高僧傳の石室傳中に揭げもしてゐる。

貞治二年二月廿五日には、大幢忌即ち月林の忌日に當り拈香をしてゐる。この語もまた語錄にも本朝高僧傳中にも見られる。語に云ふ

法身常住自凝然、正體圓明離妄緣、欲識國師眞面目、老梅枝上月圓明、恭惟、頂門豎亞摩醯正眼、隻手敲碎虛空藏骨、金陵城頭笑胡達磨觸忤梁朝主、卍字堂畔救小釋迦落賺大禪佛、列祖陳年葛藤橫拈倒用遊刃於有餘、普光大幢徵

號、天隔日照騰光輝於帝國、道契君臣德溢民物、只如古人道無影樹下合同船、瑠璃殿上無知識、且道、卽今向甚麼處與大幢國師相見也、捧香云、二十年來會苦辛爲君幾下蒼龍窟

貞治年癸卯二月廿五日　天龍法弟石室叟善玖

この拈香語は石室が龍元寺在寺の時になされたもので有り、法弟と云ふのは月林に對して法弟であると云ふ意味である。

石室は建長にあること六年、印を解いてからは建長に金龍菴を構へて居した。永和元年、平林寺の成るに及んで迎へられて開山始祖となつた。無涯の慈像讃の終りに「前建長石室叟善玖九十二歳諱書」とあるが、建長を退いた時が既に九十二歳で、平林に趣いたのはそれを超ゆる老年であつたであらう。康應元年九月二十五日、春秋九十六を以て平林に寂した。古林下の人々との交りに就ては竺僊が南禪寺に住するに際して會下に迎へられやうとしたとも云ひ、何等かの關係が存したことは確かであらう。又、古林下に參じたことのある天岸慧廣、物外可什などと交渉の存したことは石室の語錄から推測される所である。

師蠻は本朝高僧傳の石室傳中に行中至仁と石室が崇報で友であつたと言ひ、行中の謙上人を送くる偈中に「若逢石室煩通問、歳晚南湖學種蓮」の句があつたと云つてゐる。

この拈香語の石室自筆のものが現存してゐる。

## 〈　寂　　曇

この人の傳は知ることが出來ない。古林の拾偈頌卷上を見ると、次の偈頌が有り、竺僊の注記がこれに附されてゐる。

送海東曇侍者入浙

家住海門東、扶桑日先照、萬里復南來、此心俱了了、杖頭水石煙雲、眼底風帆沙鳥、索取一顆明珠、等閑傾出栲栲、落落神機轉不難、茫茫乎面誰能曉、煒煒煌煌兮可貴可尊、寂寂寥寥兮非大非小、更探驪龍頷下看、歸來說與休居老

此乃卽今之寂曇西堂也、余住淨妙時謂余曰、所得古林和尙法句、至高麗失之、乃出岳以口誦、使余書之、追、又十餘載、復會於此、乃以余所書揭於寮中、不差一字

これによれば寂曇は我國人として古林に參じた人で、竺僊が淨妙に住してゐた頃には既に歸國してゐたことが知られる。

## トその他の人々

天岸慧廣は元の泰定年間に物外可什等數十人と入元をした人である。中峯明本に謁せんとしたのであるが、既に滅してゐて會ふことが出來ず、古林、淸拙等に參じて元德元年に歸國した。石室とは恐らく古林下で親しんだのであらう。石室錄を見ると石室が像讃をしてゐる。

天岸和尙

佛佛相傳到佛乘　一燈須續百千燈、昔年脚迹遍天下　軒昂風骨自稜層　耳裏著得大海水　眼裏著得須彌山
會作鳳凰臺上客　飜身拶透列祖關　晩年自稱休科叟　南海波斯念八還

これを見ると天岸が休科叟と稱したことが知られる。天岸は法を高峯に嗣いたのであるが、休科叟は古林の休居叟に倣つたもので、古林の影響をこの一面から見ても强く受けたであらうとが想像される。

元應三年に入元と本明高僧傳の天岸傳に云ふが、中峯の寂年はそれより三年後の至治三年であり、從つて傳に船中で中峯の遷化を知るとするのは誤りである。東歸集卷末の佛乘禪師（天岸）傳に、元の泰定間に南游、本朝の元德元年に明極、竺僊と同じく歸るとするが、この說を取る。

天岸の「東歸集」を見ると古林下の竺僊、別傳等と交涉の存したことが窺はれ、又別源の「南遊集」を見ると別源との關係も知られる。天岸は香山寺に住し、次に淨妙寺に遷り、報國寺の開山となり、建武二年三月八日寂した。

次に天岸と同道して入元したと云ふ物外可什もまた林古下にあつた。石室錄を見ると「物外和尙七周忌拈香」の語が有り、語の冒頭に「昔年聚首鳳臺會、今日燒香影像前」と云つてゐて、鳳臺の古林に共にゐたことを云ひ、又物外

和尚の像賛に

運菴正派、夫澤眞孫、魁梧尨厚、道韻高尊、依稀大達、髣髴慈恩、福山親董國師席、武苑新開槽化門、全機無向背、生鐵鑄崑崙、古鳳臺前同參句、七穿八穴破砂盆

とあつて同じく鳳臺下に同じく句に參じたと云つてゐる。別源の「東歸集」にも物外の名が見えてゐるが、これまた古林下に於ける交誼によるものであらう。法を南浦に嗣ぎ、崇福寺、建長寺に住した。觀應二年十二月八日寂してゐる。

この外可翁宗然、大朴玄素、鐵牛景印、孤峰覚明、寂室元光、古先印元、中巖圓月、簡巖翁等と云つた人々も古林下に參じた人と云はれる。我國に於ける中峰下の系統と共に當時の禪界の二大勢力と云ふことが出來やう。

作品はいつも何らかの意味で、作家の實感によりたつている。その範圍で作家は作品を生きていると言える。けれども人間性を、自分の枠のなかからたたき出して、辛い旅をさせ、客觀的に追いつめられるだけ追いつめて見て、到達した地點へ自分の生きかたの足場を刻みつけて進んでゆくという、アルプス登攀のような、文學と生活との方法は、ざらにあるだろうか。

— 宮本百合子